



連袂之書信

伊地知文庫
文庫20
192



38

文庫 20
192
25

連哥乃覚悟いふうに有へき所や此の一書君録其趣

人の一好みより事おれとおろふも心よりそを

いふかきく侍れとをより先達乃いひをり一これ

一いふかきく侍れとをより先達乃いひをり一これ

後へる次第おれとてすし侍りてはとて五へき事一を

かへりてお見ぬゆきつては是人の嘲ををるは

一發句ハ祝言をわとすんきんいふより又あへんかの事

一あまふ小侍よとてさふ事事ん貴人の真行乃

亦書ふるといふ事つてひを簡要とて一あへん事

代百世あるといふねれ心刊祝言のおけり又不

去のい刊るけせハ難る能よりと侍れん事侍臣

より人侍事やれおれははり一いふ事時節後殿

号を聖
院殿 寺順法師をりて百韻あり一に發句



つふまはりるへき中言作さるるしし 臘日此十五
所るねりし

冬こもり結いせん世のまじり物 當座の附

直林勝いかに思進傳へす是ホをいさるへし次は御事

その群々あつくたれをとりゆく是怪あせん事と付備

云ふうらちしく傳へん暗の舎いよくかえろしや宗師

花よあへおほる月夜のし朝は雲 是ホを候

云よちりし事あがしん又そ一和は條くはそ前御事

一書とし其和をさし置く他一和を考せん事肯本意

事也節か十七のりりし事夜お山野日人

あすや春立結日のりし夜は雲 ぬけ

秋乃野そ十年の花乃文古る 是ホる本

意乃象句とあをりしやけ糸野邊そこの事とゆへ

形

さく藤のうゝ葉は枝の玉葉外

葛の葉やうゝわしれし向草

是ホ一詞のえんをいさるそのおまじりるせり

一服の事いさし洗思まけまや一和とゆへしそ

さあししとさううおほやしひさるし發句は似合

茶刊二統し

らと世のよの葉あひるしとさるよ

露の風や玉松のふしと

砌公服しとたのふは空上とといはけへし又

菊うら長月照るは紅葉の白 二あるし

うし手秋の目さうとさるし

いあたるるみやとさるし秋の宿

一面の句集のよし姿刊優云に考の詞乃さすのや
やうは覚悟あるまじし人の付ふくしん事たつれむ
つす近年秋の人の人乃句は或は米の産つて
ひきあると詞強すせしつらるる言云しやうも
面句はいつたりや覚悟の句ふつれ中砌云書
をうらじ凡十句め述は面の句れよくうら
二頌の本是く口ろふまやとくとてこゝと人の付
くき句は用ひ面のめ一但十句めは後ハ事唐く
まはすう一面の覚悟は似つて又そ座の元よわ
て二頌をいふやうすつてさ中一や但もさう一園
時ハ是兆事し月次の舎替古の舎ちとにいつや
もあふまじ又各うとい句多事しとすけり人
并仕手といふも人の愛むるとあしはひやう付

句事事マ物し灯唐さハ夕ハいつ從しあはし時を
をこゝ東山といふ言と傳々りや
一古事をつくは否の事一人よさうまじくは常
よけるいひら事ハつねの初めと極つてすわは漢乃
女学あつとせよとり人ぬえ人のせしあねこて
こりき事在不以いれおまへまあり起るま結ん
芝通しははちきやいもんや我と記乃未練乃筆
そいつれいへす但一糸は研破しん事よあはれ
てハ貞あんとけ子句下句の席うして事唐く
覚悟をへ一又ハ人の誰句さる時安くけがして
やうき事ハち切の事よし
一は奇の詞句をな事并日集のよお一は幾度と
二カん否事一丹よまやうの事おる類あしんあつ

ひる記よし似たりきと再いふの類の歌ありし
詩詞をいふ知れず事ハ從よりしき事とてし

こらわよおほはる原の歌しと云ふも順

兼にがれりうまののおおひ 是ハ若世

卷ハ源氏傳云ハ遊給く 是ハ又逢夜抄の
号のうらよやそしゆきち我力さししと清経
抄ハ源氏傳云 せらんに人やけらんしとひるく
うき方をさめぬ後よりしと 清経より又源氏傳
事ハ 一人の神方と云ふと云ふと云ふと云ふ
是ハ源氏傳の所返りしけらぬといふなりと云ふ
此や卷ハ 一よりしてけらぬと云ふ 節目ちれを
まわと云ふ節目ちる 一してしと云ふ 是ハ
けらぬや上手の志と云ふ 是ハ一と云ふ 又右の事

仰ふの句ハは百韻の目とありあり句數多クハ
ふ若くや句とすなりと再ハ立し事ハ 但し宜
しと云ふ事

一漢文がしるしといひおやる句ハを類して一付との事
あかから漢を漢とせしめし付し事ハ不二相定と又蝶ハ付
まあたるこの古事ハ 上手の志と云ふハ 詞ハ
うたぢりり 和のしるハ 下手の句ハ 詞ハ
くハ 夢より 飛渡の文ハ ありと云ふ事

一源氏伊勢物語并八代集いれを目るハ 一物ハ
の事 源氏物語伊勢物語ハ 常の事ハ 一物ハ
いふハ 及をすハ 代集乃中ハ 古今集をいふ事
尚世ハ 新古今集をいふ事ハ 一物ハ 和奇ハ

花と実とあり古今集ハ實新古今集ハ花也
一雨淫つれくもあれよ手判よ手安を二用也
一尋合却二の怨ん心を去にも事ごとし乃事付合ハ神の
の殺との好く人ともあはれと返者乃上りて二嫌事ハ
あつたらん但付合をとりとす沉思セハ何よわお来一
中云乃勺ちるく一

一千句と百韻連言のつらひ乃事付やハ差割
くくくくく千句ハ物あひをわ死事なるハ程の
つれをちらて更んまもや百韻連言ハけハああの子
句ハ似き小をそれよほしていよく句をくくく
手事ハ但合は句を去りて二葉ハ対面ことと
うつりをくくくくくつて二然とく千句ハくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ぬ句もさくく其面をさりぬりしと無恙乃らする
ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくく
一雪月花乃事月ハぬくくくく面無念事一前
句表なるるにけなる夜なるぬハ夜なる月を
付ハ事ハけハ有とく一あ事ありて水ハ其面ハ
月ハ句なる事ハいつくする花もぬくく一さく
一雨のくつ事ハ雪と花とハ百韻乃田三句四
句の系物なるも花ハ黄也くくくく大切
乃ららすつくも花の白ハくくとあやよき花也
指ハ事なる花ハ雨ぬくとあめれんあく物ハ
ちりく但下の句ハくくくくくくくくくく
重の中あり是ハ花の句ハ不三限くく付も
ゆ水ハ前句ハひれくく其威ハ来事ハきりく

一宗物よ心をくくもや乃事一あめうらぬ事この世も
んいしやまにむ白之信くし白物も寄来むさく
元あやん事一も感あつてん平均をくくも
はゆり句をくくもさくすまもや

一戀述懐下敷控方ホ句事恋の句いつたも切よ人
をぢりふるる人一我余情祿とりしき今も
方る小とるとよあると思あわ恋侘くらんあれ
たよる人をくくも中後いりものゝ恋の平意よ
あし又け道はま後よす西行法師のまよ
し表とて人のれ情あれが昔のぬはくぬ歌まを

連るよハ

いづろろろあまの情い

人こあらのめらやれそにこよ

とまの宗物
はホを志

りへー又

方をしれ人のごとく思はぬは恨るぬしめり神れ
うき方をい我たにいふ人くも我た甲と思ふ
い三首の戀乃方物く述懐や是をいくきん一又述懐
白小背甲意方のこよ

隠家一り人のまろり花咲く

こいれおく人乃まむ世をりや控く かや世頼ハ

あしこし述懐も限目懐の白まやまんの句不可
然又老乃句四十歳乃以後もくまとしり小く年ま
さる人のこまなまあはるく人け事とく世の事
やうの所いしん事し餘も居歌あうり一こけ
互をぢりまちり

先をける人をしれもあはれ

此のむし... けの類ある
人前乃類日書のせしめやうよ是の作り是はま下のうご
是迄及ふ小の二姓もえううううう

御遊乃小舟ううよこのおぼしけ

いつにのめあめいそしけらに 源宗

二箇小人き夜かめき別後ト 景石

又いつあめいこ白りこまのよに 基佐

是亦てまたうう類し

け存に西母ううよ亦牽して

いつにのめあめいそしけらに

日前又下白此中

甚乃草一葉え雷またんあ

く振出御不書ふるしけらうううううの事照して

けのて

申也又

又これいむし秋の荒り

雲井一乃鶴の起るう中うの びり乃類

あ乃下白二何くうううし又類の住り乃白と

人の写して送るは

やういむしあし類のすまあ

是ちあ世のあくささうい

そろく水けいあやも也 元六種守概

さる辨し根け類を数考こあむ人あつた類こすぬ

かあううす誠忠ちういさう不二姓

一平均にさうう定乃事更よらうしけら下白日前

又初立文字うしあうしあやを油煎やあもあ

てあといとあううあ是は白は也若あううあ

候く時々のやうに侍る

云地とあるやいあるやと一息俣ぬ

省柏去

年とやし春日の長書ありそ有韻京都十景
写本下着するにけ句ありてよハ二思

明らわたつ朝もにみれあやめうれ

花さうりあるちねゆる日暮るれ

兼哉宗長

数ゆるこいつねとてよと振らるあやめ草一思

あし赤もちねふあとおふよれわがしや又か

とさるる句はよといひいさく白ありそとて

こころ句よふれといひいさくありたると

花も似色香馬さるふ文古う那

是ハ都々

てとつひさき句しれといひいさく色香まらうれと

へしそといひいさく色香まらうれとつひさき

一勾のうへあそく心をうへー又かたよそたあ二万(字)はく
うね句あり

友山を元といふ乃ことりうれ

銀うそくた

いそり句し

一うあ句の気句の事

玉札所紙一を二馬のらうそくた

らうそくたあけや恨ますれん

源玄

山越乃るるはゆくとたやまは

田やまやこぬるやまむ屋人

宗頼

字のーら二字しうらるこ早しん板いさーこさる

句類しとびさとうらる類し又字まーら板いさ

五字乃まあをいうらるあはこく人ん板いさ

とあるま久ーくとうけいらるなゆおれー事乃

やうな事とくくさいつていふたとくけりるは
正と乃一字ありてまうし是をたは怪の人と
なり一初草抄といふ忠説初巻のつれをへられ
頼朝一を二冊にして初巻を三巻傳へたり
中下巻判紙をよへられ世常流布
て件のかげやうを皆人志あり初巻は定乃とあり
と云やんその中一

乃らそ新乃友なきをき

山にさうり
けり紙

信勺とおせり
又うけ勺

ちみふしれをり
すめり

朽そく板田の流乃楊
宗初

けくく
まふら

生さいつまをや
忠説勺

け土筆志
け勺けく

とある知あり
けく

はあひら
あひ

本け勺
け勺

お付す
け勺

お玄よ
け勺

本を
け勺

乃
け勺

一源氏伊勢
け勺

した
け勺

和奇
け勺

心を
け勺

よきやうなる街の市にこそあり

松よりわろいわざをよられ夕つす

凡そうきあき橋北のあひ

船をいそはかすむ神や後

以上砌る夕し凡そくををさる又文字并書也

又松よわるといつい夕鳥いつら是月上村移す

おのし事かこしやうにおもつ口惜事也舟志

白ハ風多し船といふの預あわく入いひる

いふ白し又考順付白り

世にあのまると方をくす人

老乃後つつん道におこす

逢込といへるまをたあぬといひ形し又

一本のうきよやすむ山也

是のま

大分や林麓の書城志

志記一本

の隈みと云に文字を一本のけ故は山移みや

ら板心まけちせりしれし志行つまをる水也

はしの穂古乃為まほく

さす乃く徳さる澤の代

香柳や山をねむ乃物ぬそ

源宗

前の夕を叙する白そ枕より取らたやうに松

守れりや

いろをちおひんる一顧のち

松のりかなる山の望む月

宗和

おひんをたしと云に松のりかなる月といふり寺堂

云堂はぬや形るを言ぬ乃寺と松乃りかなる

つひそ眼前の景気也

いれを命りぬ高き此の山
所跡す澤田此跡は出鳴て
幾家安んじおひしる事あり

高泰

よきまの君のまろいしまゝに
めれちぬはけあまがさうに
白の群れあそびは感よしく
あつと云ふとくお叶ふや
屋すいすい

一詞うさるねと句此群よりし類乃事

うき物おれ名はまろく人かこむとま

つたまのめいらくれ山

今何砌云

鷹後乃詞よけまのく思乃次来乱るる
と句ふたりてけ群中く出云の凡情免ゆやと

あつて合点や此類は多き句の中一平
おまやんをさのこ研研しん事
け群を好くしとあまもを
お事しんは但いおはま
此の音教あぬ事
つたまのめいらくれ山

まの音や花の赤倍れ善の善
砌云くハ音乃と採やれ
うめる屋うるれと傳云よめし
此句ハ詞はくし乱れし
をいす
一よりまをぬ句の事

をいふ人の中事也貴人連帯は句敷をい
治くた人切者如く三句し其句敷まはるや
は是悦上人事半や大略は昔人といふ事切
者をしふれし句敷は馬をいふ句とて
や但月次の舎又ハ能言者乃為サといふ句は
又るれくしは此の時定は依りし

一仕手といふ中事人又まこれ仕手まはる
仕手あり早口ももあつて待子及をぬ
るのうしきくしははる世ハ仕手をぬるやあ
況や馬を仕手ぬるを待く事半や
是らつら乃りらる人ハおそ連元乃け
はらふるぬをいふ人ぬと下は仕手ぬる
事や久き事をしてはるすしはる川研破

乃と那しき事何事半らるし新白く人
の付えしし事をおく人ナリ今度付んか
事トさしに乃ひろく事半大切乃事
るらん

一句をおさし事ノ乃事しうすいふか
二句し

已上

追加 上は事半乃事

おほる夜 脱日夜は面白く 小田も是 人の名は徳を
著大 人多くと川着は四月 小雨 秋雨 屋陰但
物もはしはるひさし乃屋陰也

あまふ乃新造うそ乃森谷がうろくもて
子細ちしとこ

冬山

四変の中めていかにぬれし但砌云句入り
本堂の冬山とあり是しるるにいれりいあり
つすとしはまの句を御定ておろるる

在明月

文意あやふと後あし
ありのこと
白所云の字に
物るとこまるとし之に原義とこと
是はゆめさう
すされいふと性

右砌塵抄

一本字をさうに三句よつらるる

立判いかにぬれし
けきをねいし
けきをねいし
けきをねいし

まのそきふはと三句よつらるる
けきをねいし
けきをねいし
一本抄をさうに

我門よいるあはせ名め
此ををねるは
我門は唐かつめ

山ちのまの又書き
け入舎の境
けやあ
一てよそ
二病は

丁卯乙卯の用抄あり

永正九年九月日

一冊右京進氏長依所居書之

前能登守早朝朝定在判

右一帖太田恒能判朝定以自筆控本令写之
然處以一冊太田垣加賀入道宗喜山本若雲守
歳朝取抄之君与本校合至相違者也

天文廿一年生上旬六十校至備前守高能

小川三右衛門尉八十一

天正三丙三月日 備前守高能模写之



